

レシピタイトルに現れる借用語 *with* の特徴： 随伴用法と等位接続表現に着目して

小野雄一

筑波大学 人文社会系

ono.yuichi.ga@u.tsukuba.ac.jp

1 はじめに

産出された言語データにはさまざまな言語使用上の要因が関与する。料理のレシピタイトルを例にとると、調理者によるユニークな調理過程や使用する材料の特徴など、様々なアピールポイントが含まれる。そして、調理者がレシピタイトルを考案する際には、外国語表現を日本語の語形成規則に基づいて極めて自然に借用する[1][2]。英語前置詞も頻繁に使用され、例えば *in* や *on* に加え、随伴の意味を表す *with* もまたレシピタイトルの中で使用されている点が報告されている[2]。また、ほぼ *&(and)* と同列に扱われそうな等位接続表現として *with* が使用されている例についても報告されている[3][4]。しかし、詳しく観察してみると、*&* と *with* との間には、「独立随伴性」という観点で違いがあるのではないかという主張も展開されている。

本研究では、国立情報学研究所(NII)IDR 事務局が提供しているクックパッドデータベースⁱを基礎資料とし、レシピタイトルの背景にある調理過程にも注目しながら観察をした上で、*with* の独立随伴性について考察を行う。その上で、この概念は日本語母語話者の中で意識のうちに共有されている知識であるかどうかを実証するための心理言語学的実験を行い、この観察の妥当性について検証を行う。

2 先行研究

2.1 *with* の借用

「チーズ *in* ハンバーグ」や「ビーンズ *on* トースト」に出現する *in* や *on* と同様に、英語の前置詞 *with* も日本語のレシピタイトルに出現する。*with* の主要な用法には(i)「独立随伴(1a)」、(ii)「道具

(1b)」、(iii)「主原料・主材料(1c)」があるとしている[4]。

- (1) a. ピクニックから揚げ♪*with* Coke
(=用法(i))
(<https://cookpad.com/recipe/545914>)ⁱⁱ
- b. モリ食堂【節分豆茶飯 *with* 釜】
(=用法(ii))
(<https://cookpad.com/recipe/490331>)
- c. 栗ごはん🍎*with* 黒米
(=用法(iii))
(<https://cookpad.com/recipe/658711>)



(1a) (1b) (1c)

これらの *with* の3つの用法は実際に英語で使用されているものと（ほぼ）同じものと考えられるため、日本語のレシピタイトルで出現している上述の *with* は、英語の前置詞 *with* が借用されたものと考えられる。

- (2) a. I was at school with my friends after school.
(=用法(i))
- b. John broke the vase with a hammer. (=用法(ii))
- c. The fish is preserved with salt.
(=用法(iii))

ⁱ <https://www.nii.ac.jp/dsc/idr/cookpad/cookpad.html>

ⁱⁱ 本稿であげる URL 情報は、本稿執筆時（2020年12月23日）に確認がとれたものである

これらの3つの用法は、元来は英語の *with* が取り入れられ、その後日本語の文法知識、語彙形成規則が適用され、日本語の一部として極めて生産的に生成されるようになったものと考えられ、母語を日本語とする人であれば、多少のニュアンスの違いや語用論上の意味解釈の差異はあるにしても、基本的なところについては間違いなくその料理の意味を理解できる。

言語混交(Language Mixing)の研究では、外国語の借用が起こる時いわゆる内容語(名詞、動詞、形容詞など)がそのまま取り入れられる場合もある一方、機能語(冠詞、接続詞、前置詞、助詞など)も取り入れられることもある。そして、日本語に取り入れられたそのような語は日本語の一部となる[3]。その際に、借用された英語は日本語文法、語彙規則の操作を受けるため、一見したところ「英語としては誤ったもの」、いわゆる「和製英語」と呼ばれるようなものが多く含まれるが、これはまさに、日本語の文法知識、語彙形成規則の影響を受けたものであると考えるべきであり、英語の習熟度とは無関係の現象なのである。

2.2 随伴と等位を表す *with* の方法

上述の(1a)に該当する随伴用法の他に、以下に挙げるようなものが観察される。

- (3) a. シンプルいず おされつまみ with 梅酒
(<https://cookpad.com/recipe/1139261>)
b. 粉もん WITH ソウルマッコリ
(<https://cookpad.com/recipe/1527087>)



(3a)



(3b)

これらの特徴は、(1a)の「Coke」、(3a)の「梅酒」、(3b)の「ソウルマッコリ」はそれぞれメインの料理の一部、材料・原料とは考えられず、随伴性としては両者が独立したものと考えられる。ただ、これら

の例であれば、*with* の前後の料理のうちメインは *with* の前にある方と見るのが自然である一方、*with* の前と後の料理で、どちらがメインなのか判断が難しい例も存在している。

- (4) a. ♡ペペロン with ミネストローネ♡
(<https://cookpad.com/recipe/1793189>)
b. 赤フィッシュカレーWith そうめん
(<https://cookpad.com/recipe/1139261>)
c. 豚肉のしょうが焼き with 十六穀ごはん
(<https://cookpad.com/recipe/1958372>)



(4a)



(4b)



(4c)

これらの例では、どちらか主役とは捉えにくいものとなっている。むしろ、「A と B」の関係、つまり、等位の関係と考えられるものである。等位の関係ということであれば、英語には「and, &」がという等位接続詞が存在するため、そちらを借用するのが自然であるという議論があるのは当然である。実際に以下のような用例も存在する。

- (5) a. ぶどうジュレ&杏仁豆腐
(<https://cookpad.com/recipe/1228987>)
b. 初マヨ焼きそば&ステーキ&アボカド♡
(<https://cookpad.com/recipe/6570446>)
c. 合い挽き肉&鳥ミンチ&豆腐ハンバーグ！！
(<https://cookpad.com/recipe/6567038>)



(5a)



(5b)



(5c)

随伴性という点から&を考察すると、(5a)のように両者が接触している場合、(5b)のように「独立随伴」的な場合、そして(5c)は全ての要素が1つの料理に取り込まれているものなど多様である。

さらに、英語の *and* の使用では見られない、日本

語に取り込まれた&独特の用法も観察される。

- (5) a. 麻婆豆腐&麻婆もやし
(<https://cookpad.com/recipe/1279164>)
b. 裏ワザ プリン&杏仁豆腐
(<https://cookpad.com/recipe/641881>)



(5a)



(5b)

(5a)(5b)の料理の特徴は、調理の途中までの過程は同じであるが、ある段階でAをいれるかBを入れるかで異なる料理ができることを述べている。いうならば途中で投入するものによってAの料理にもBの料理にもなる、つまり、「AまたはB」と並べている場面で&が使用されているのである。これは、投稿者のコメントで「豆腐はもちろん、豆腐がない時にもやしでやってみたら美味しくて両方ともこの味で美味しいので♪」や「●杏仁豆腐の場合●アーモンドエッセンスを入れてできあがり。●プリンの場合●カラメルソースを作る。砂糖と水を鍋に入れ…」と記述されていることから明らかである。著者の直感ではこの用法の時にwithと置き換えることはできない。この理由は、withの場合は独立随伴（つまりその場で両者が存在していなければならない）の時に使用され、(5a)(5b)の「AまたはB」のような例の場合には代わりに&であれば使用できるという、日本人であれば誰もが共有される知識を無意識的に利用されているからなのではないかと推測する。

3 実験

3.1 仮説と手続き

今までの観察を整理すると、①「withが等位接続的に使用できるのは『独立随伴』の場合のみである」、そして、②「この知識は日本語の処理に伴う知識であるため、英語の習熟度とは無関係である」という

ⁱⁱⁱ この料理も途中のパテを作るところまでは同じであるが、それをパンで挟むか、ライスで挟むかで2つの料理を作製するものである。(<https://cookpad.com/recipe/2866003>)

仮説へと導く。この仮説を実証するために、英語の習熟度には差があると考えられる2つの大学の大学生（A大学104名：偏差値50-55；B大学51名：偏差値65-70）を対象に容認性判断課題を利用した実験を実施した。

実験協力者には、実際に投稿者がつけたレシピタイトルは見せず、料理の写真およびコメントのみを提示する。その上で、「A()B」に、「&, with, (&を日本語にした)と、か」をランダムに挿入した文を提示し、「まったく良くない(1)」から「とてもよい(5)」の5段階のスケールから容認性を判断するようにした。

ここで使用した刺激文は以下の通りである。

- (6)
(i) メカジキのソテー () 絶品トマトソース [随伴]
(ii) アイス de 蒸しケーキ () レンジ☆ [道具]
(iii) 麻婆豆腐 () 麻婆もやし [A または B]
(iv) 時短 ライスバーガー () ハンバーガーⁱⁱⁱ [A または B]

もし仮説が正しければ、我々の予測は、(i),(ii)については典型的なwithの方法であるため、withの用法が優勢になる。特に、道具の解釈を持つ(B)は&には存在しない解釈であるため、withが優勢になると予測される。また、(i)の随伴については&も同様な意味を表すことがあることから両者が同程度になるのではないかと予測する。逆に(iii),(iv)については、&の容認性が上がり、withの容認性は落ちる、ということ予測する。

3.2 結果と考察

実験の結果を以下の表1に示す。

表 1 容認性テストの結果

			平均	標準偏差
A-1	(随伴)	メカジキのソテー「と」絶品トマトソース	3.2857	1.2665
A-2	(随伴)	メカジキのソテー「&」絶品トマトソース	3.8117	1.0953
A-3	(随伴)	メカジキのソテー「with」絶品トマトソース	3.8766	1.1337
B-1	(道具)	アイスde蒸しケーキ「と」レンジ☆	1.8774	1.0151
B-2	(道具)	アイスde蒸しケーキ「&」レンジ☆	2.3484	1.1373
B-3	(道具)	アイスde蒸しケーキ「with」レンジ☆	4.5613	0.7033
C-1	(AまたはB)	麻婆豆腐「と」麻婆もやし	3.1429	1.3788
C-2	(AまたはB)	麻婆豆腐「&」麻婆もやし	3.1234	1.3544
C-3	(AまたはB)	麻婆豆腐「with」麻婆もやし	1.7792	1.0369
D-1	(AまたはB)	時短 ライスバーガー「と」ハンバーガー	3.5613	1.1112
D-2	(AまたはB)	時短 ライスバーガー「&」ハンバーガー	3.6645	1.2289
D-3	(AまたはB)	時短 ライスバーガー「with」ハンバーガー	1.8839	1.0928

この結果を見ると、我々の予測はほぼ正しいものであるとみることができる。(A)の随伴用法については、with と&およびとの間に大きな差が観測できなかったのに対し、(C)(D)についてはwithの容認性は大きく落ちた。

また、特に(C)および(D)の用法については、一元配置分散分析を用いて、with, &, との用法の平均値の差の優位性を検定した。その結果を以下の表2に示す。

表 2 (C)および(D)の用法に関する差の有意性検定

ペア	t値	p値	***p<0.00
(C)麻婆豆腐()麻婆もやし			
with-&	11.5564	0.000	&>with***
with-と	11.8193	0.000	&>with***
(D)時短 ライスバーガー「と」ハンバーガー			
with-&	13.7119	0.000	&>with***
with-と	12.8324	0.000	&>with***

以上の結果は、借用された&と同じような等位表現としてのwithが使用される場合においても「随伴性」という知識に結びついているのに対し、&の方が(C)(D)のような「AまたはB」のような文脈でも使用しているということ、さらに、これらは母語の知識を無意識に利用している点を実証したものと伝えよう。

さらに、英語の習熟度がこの結果に影響しているかを検討するために、同じデータを習熟度(大学A/大学B)とそれぞれの結果(文1~4)について二元配置分散分析を用いて検定してみたところ、全ての結果について、群間に有意な差は認められなかった。

例を一つだけあげると、(D)「時短 ライスバーガー()ハンバーガー」の場合、withの容認性が他と比べて大きく低かったが、大学A(Level 1)と大学

B(Level2)の間には大きな差が見られなかったことを以下の図1に示す。

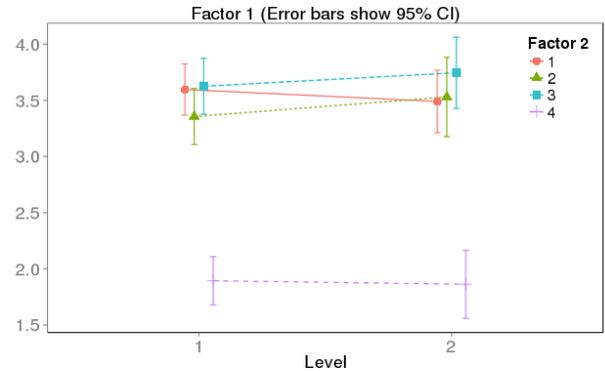


図 1 群間の差の結果

Factor 1,2,3,4はそれぞれ「と」「か」「&」「with」であったが、横軸(群間)には大きな差が見られなかったことがわかる。この結果は、Withの知識の深さは、今回の判断テストには影響を及ぼしていないことを示している。

参考文献

- 日本語の料理名に出現する英語前置詞の借用について：Cookpad データと実証実験から見えるもの」小野雄一・呼思楽・森野綾香・若松弘子・砂川詩織、言語処理学会第23回年次大会発表論文集2017.
- The Verbal Noun Use of Borrowed English Prepositions in Japanese Recipe Names, Yuichi Ono, Papers from the 36th Conference of the English Linguistic Society of Japan and from the Eleventh International Spring Forum of the English Linguistic Society of Japan (JELS 36), pp. 268-274. 2019.
- Use of English prepositions as Japanese predicates: A challenge to NLP, Masaharu Shimada & Akiko Nagano, 『言語処理学会第23回年次大会発表論文集』2017.
- 料理サイトのデータから言語接触理論を考える：前置詞 with の借入について. 若松弘子・島田雅晴『IDR ユーザフォーラム』2017.